

国絵図の鉾山情報



長谷川成一

近年、近世史研究の中で国絵図こくえずとそれを活用した研究が、長足の進歩を遂げていることに異論を差し挟む人はいないであろう。筆者が関係している『青森県史』編纂事業においても、当該地域の近世史研究に資することができればと考え、『青森県史』資料編近世Ⅰ（青森県、二〇〇〇年）に、正保二年（一六四五）「陸奥国津軽郡之絵図」（青森県立郷土館蔵）と同四年「南部領内総絵図」（盛岡市中央公民館蔵）を付図として添付した。拙著『弘前藩』（『日本歴史叢書』六三三）でも、両図を大いに活用したことは言うまでもない。

周知のように、右の両図のほかに、秋田県公文書館には正保四年「出羽一國御絵図」が架蔵されており、これら三つの国絵図を合わせると、正保期の北東北地方を総体的に把握することが可能になる。幕府は、正保国絵図をまとめて、「正保日本図」を調製しており、これも前掲『青森県史』に、北日本の部分を収録した付図を添付したので、参照されたい。「正保日本図」には、国絵図に描かれたさまざまな詳細情報がほとんど省略されていて、近世国家の全体像を掌握するには適しているものの、十七世紀中葉

の領内状況を観察するには、やはり各国絵図を参照するしかない。そこで本稿では、国絵図に見える北東北の鉾山情報、なかでも津軽領のそれについて、検討することにした。

幕府が各大名へ命じた正保図の調製マニュアル（近藤正斎「好書故事」巻第二八など）には、領内鉾山の所在と金銀の産出状況を絵図の中に描出せよとの文言は認められない。管見の範囲では、領内の鉾山に関する情報を描き込んでいるのは、右の三つの国絵図と「石見国絵図」（大森銀山を描く）であって、これらは例外的な存在のようである（川村博忠「元和年間作成の石見国絵図について」『歴史地理学』一九四、一九九九年）。大森銀山は、幕府直轄銀山であるから、国絵図に描かれることはあり得るとして、陸奥・出羽両国の各領図に、幕府直轄鉾山でもなく佐渡などの巨大鉾山でもない藩領の鉾山が描写された理由は、いかなるところに求められるのであろう。この点については残念ながら、現在、明確にできる材料を持ち合わせていない。

さて、津軽・南部・秋田各領の正保図に記載された鉾山は、次の通りである。

○津軽領 銀山(入良川銀山)、河原沢金山、虹貝金山

○南部領 白根金山、西道金山

○秋田領 銀山町(八森銀山)、銀山(阿仁銀山)、鉛山(土倉鉛山)、銀山(新城銀山)、赤沢金山、比内沼山金掘場(比内沼山金山)、金掘場・金山町(大葛金山)、銀山町(院内銀山)など

右の中でも、津軽領は金銀産出情報が記載されている点で、他領と相違する。そこで同領の鉱山情報を、正保、元禄、天保の各図の段階を追って明らかにしておくことにしたい。

正保図に見える入良川銀山は、青森県西津軽郡若崎村にあつて、秋田領の八森銀山に隣接。同じく河原沢金山は、中津軽郡西目屋村、虹貝金山は、南津軽郡大鰐町に所在。現在いずれも稼行していない。河原沢金山には、「近年金出不申候」、虹貝金山には、「近年かね出不申候」、入良川銀山には、「近年者金出不申候」との肩書きが付され、三鉱山ともに正保図の提出時には、産金銀が乏しいむねを記述しているのである。拙著では、当時の弘前藩における領国貨幣の発行・流通状況から見て、この情報は信用しがたいと叙述した。この後、弘前藩では寛文→延宝期にかけて、領内鉱山の見立てと開発に精力を傾注し、寒沢と尾太両鉱山の金銀産出に領内が沸き返ることになる。詳しくは、拙稿「尾太以前——近世津軽領鉱山の復元と鉱山開発——」(『青森県史研究』七、二〇〇二年)を参照されたい。

現在、津軽領の元禄図は、弘前市立図書館と国立国文学研究資料館史料館(東京)双方所蔵の『津軽家文書』には架蔵されている。

ない。秋田県公文書館と盛岡市中央公民館には、元禄十四年(一七〇二)「津軽領秋田領縁絵図」「津軽領境図」「津軽領境津軽方図」などが所蔵されているが、未見であるため元禄図であるのかどうか分からない。しかし、弘前市立図書館蔵『津軽家文書』に、天保図である「陸奥国津軽領絵図」が数点確認され、加えて国立公文書館内閣文庫でも清絵図(清書した国絵図)の津軽領天保図を写真版で閲覧できることになったので、次の理由により元禄図と天保図については一応の言及が可能となった。

天保六年(一六三五)十二月、幕府からの指令によれば、元禄図を写した切絵図(この場合は、一枚の国絵図を何枚かに分割して写したものを指す)が各藩の担当者に渡され、変更箇所を掛紙で示すことが要請された(『牧民金鑑』)。右の指示から判断すると、津軽領の元禄図を確認できない現状では、掛紙が付された国絵図を幕府へ提出された元禄図と見なして良からう。当該図に該当するものが、「陸奥国津軽領絵図」(弘前市立図書館蔵、請求番号M一九)である。

右図によると、入良川銀山は「銀山 入良川 但近年石銀出不申候」、河原沢は「金山 河原沢 但近年石金出不申候」、虹貝金山は「虹貝金山 但近年ハ金出不申候」とあり、これらはすべて墨書されている。これは元禄図にそのように記述されていたから、そのまま訂正なしに記録したのであろう。つまり、津軽領元禄図では、正保図と同様の鉱山情報が絵図に書き込まれていたのである。一方、右図には河原沢金山の南側、秋田領との藩境付近に、朱

書で「尾太銅山」の記述がある。尾崎久美子「天保陸奥国津軽領
絵図の表現内容と郷帳」(『歴史地理学』二二四、二〇〇三年)によ
ると、掛紙と同様、朱書は天保図で新たに書き加えたものである
という。元禄期には、すでに尾太鉾山の開発がなされ、湧水によ
る坑道の水没によって銅鉛の生産が衰えつつあったとはいえ、稼
行していたことは間違いない。しかし、元禄図には描かれること
はなかったのである。天保の段階で尾太銅山は、ようやく新たな
鉾山情報として国絵図に描かれたようだ。

数点ある「陸奥国津軽領絵図」の中でも、清絵図に近いレベル
に達した天保図(弘前市立図書館蔵、請求番号M二〇)によると、
尾太銅山は朱書ではなく墨書で記され、入良川銀山には、「伊良
川銀山近年銀出申候」、碓ヶ関付近の「湯之沢高山」には、「湯之
沢山銀山近年銀出申候」との朱書が見える。内閣文庫の清絵図で
は、尾太銅山と入良川銀山の記述はそのまま墨書されているが、
湯之沢銀山に関しては、一切の記述が認められない。清絵図に至

る段階で、鉾山情報の取捨選択がなされたのである。

天保図を調製する過程で、弘前藩と幕府勘定方との間で交渉が
行われたことは前掲尾崎論文に詳しい。これは天保図に限らず、
正保図や元禄図でも同様であり、天保期に至って鉾山情報を国絵
図に書き込むことが幕藩双方の検討対象となったことは、興味深
い問題である。正保・元禄期にあっても、新たに開発された注目
すべき鉾山が各領に存在したにも関わらず、それらが国絵図には
ほとんど描かれなかった事実があった。一方で幕藩間の交渉を経て、
天保図への鉾山情報の書き込みがなされている。その背景は何だ
ったのか、さらに検討が必要であろう。

(はせがわ せいいち・日本近世史)